移民と商業ネットワーク

——潮州グループのタイ移民と本国送金——

濱下武志

はじめに

移民問題とりわけ国境を跨っておこなわれる移民は、既存の国家関係に様々な問題をもたらしてきた。例えば、「多民族国家」「複合国家」などは、移民をとり込んだ側からの、新たな国民統合の理念の追究であり、「大民族主義」や移民先からの本国送金による「財政援助」などは、移民元と移民先との関係をめぐって生じた問題である。

さらに、移民の歴史的背景に基づいて生じている民族問題は、ソ連・東ヨーロッパの例を見るまでもなく、国家や国家間関係に対して、民族的自立を強く要求している。しかし、かつて、一九世紀末から二〇世紀中葉にかけての植民地主義からの自立という、いわば、歴史的に〝無条件〟に受け容れられた「民族独立＝国家形成」の構図とは、現在の局面は大きく異なっているように考えられる。とりわけ、〝民族問題〟、は極めて強く求心的かつ排他的自立を要

求するだけに、これを〝地域秩序の安定〟という観点から見るならば、不安定要因を増大させている。(1)

移民問題の歴史的検討は、広義には現代世界における地域問題のあり方を考える要素であると同時に、移民政策の現代的あり方を考える課題を提供すると思われる。以上の関心を基礎として、本稿においては、一九世紀末から二〇世紀にかけて、タイにおける華人社会の特徴と、移民元との関係を、広東省潮州を中心として見ることとする。

周知の如く、タイの華人社会は、それを歴史的に見るならば、移民社会として形成された。従って、タイの華人社会を理解するためには、

1　移民先のタイにおいて、定着化の過程に生じた問題、

2　移民元である出身地側の特徴と移民先との関係をめぐる問題、

これらの二側面からの検討がなされなければならない。

同時に、移民先における華人社会の特徴を検討する場合には、次の三点に亙る視点が必要であると考えられる。

1　移民元における社会経済活動の特徴がどのように移民先においても維持されているか、という〝連続性〟の側面、

2　移民によって、在来の社会経済的活動が変容したか否か、従来の社会的紐帯に変化が生じたか否か、という〝変化〟〝付加〟の側面、

3　移民によって、維持や変容の側面のみではなく、新たな生活方式や活動様式を開始したか否か、とりわけ、西洋の影響に如何に対応したのか、という〝新設領域〟の側面、

以上の三分野に亙る分析が必要である。(2) そして、全体的に見るならば、これらの三側面は、東南アジア各地の華人社

会一般において見られるところであり、そして、各側面の現われ方は、世代によって、また華人集団内部の結びつきの強弱によって時代や地域を異にしながら顕在化してきたと言うことができよう。(3)

一　歴史的背景

タイの華人社会の検討に当っては、まず中国とタイとの間の歴史関係に照らして見ておく必要があると思われる。何故ならば、従来のタイへの移民問題は、タイ現地の華人社会の出身幇の分類をおこなうことを以て研究の主要な目的としてきたため、何故ある特定の幇が特定の時期に他の幇と異なって移民を進めたのか、何故ある特定の幇が移民先において勢力を占めるようになったのかという問題に答えることができなかった。

具体的に見るならば、一三世紀から始まるシャムへの移民では、福建グループ（幇）と広東（広肇）グループとが先駆をなすが、一七世紀以降潮州グループが進出し、急速にその数を増大させ、福建・広東グループを抜いて移民全体の過半数を占めるようになった。この変化の理由はどこに求められるであろうか。従来の研究にあっては必ずしも明らかではない。本稿はこの点についても考えようとしたものである。

移民先の華人社会は、いわゆる「華字紙」の発行を通して全般的な情報のネットワークが形成され、利害集団・学校・福祉団体などが組織されると共に各集団内部の紐帯が維持される。前者については、バンコクの華字紙の一つである『新中原報』の編集長であった呉継岳氏の自らの体験に基づいた著作によって、また後者については、バンコクの中華総商会、潮州会館、広肇会館、海南会館、客属会館、その他各地の中華学校、慈善団体などの資料を通して検

討することとしたい。

呉継岳氏は、来タイ時の状況を回顧して次のように記している。

五〇年前（一九三〇年代初）、私が始めてバンコクに来たときには、華僑が市の中心に集住していたために、バンコクの華僑は巴城やシンガポールに比較してはるかに多数であると感ぜられた。特に耀華力（ヤワラート）と三聘街の一帯は、会う人すべてが皆華僑であり、シンガポールのように多くのマレー人やインド人及びその他様様な人々がおり、さながら人種の一大集合地であることとは異なっていた。もっとも、その頃の普通のタイ人男性は、多くは華僑の服装と同じであり、上半身は白の西洋式の衣服を着ており、ズボンは、中国産の絹のズボン又は日本製の人絹のズボンをはいていた。また、帽子を冠っており、膚の色も大体同じであり、初めて来た人には、誰が華僑で誰がタイ人であるかを区別することが難しかった。……華僑がタイに来ることについては、当初全く制限は無かった。二〇世紀の二〇年代以前には、タイ国は移民条例が無く、当時は二〇〇〇～三〇〇〇トンの貨客船が週二回バンコクと汕頭の間を往復していた。潮州・汕頭一帯の人は、四～五ドルの大洋〔銀貨〕しか持たず、船の切符を買い求め、竹かご一つと数着の衣服を携えただけで、バンコクに来て生活の手段を求めることができた。切符を買う金が無い者でも、混れ込んで上船することができた。仮に発見されても、罰は船上での労働のみであって、バンコクに到着したときには、一様に自由に上陸できた。貧しく知識の無い者でも、バンコクに来れば、最低でもわずかな〝雑業〟か車夫の仕事を見つけることができ、生活問題は解決することができた。しかもこれで半年か一年が経過すれば、〝唐山（中国）に帰る〟ことができたのである。このため、潮州人でタイに来る者は益々多くなり、旅費が極めて安いことも与って、毎週二艘の汽船は、往復共に満員で、七日間の行

程の間、誰も戻ることは考えなかった。そこで多くの華僑は〝自分はズボンの片方に足を通しただけでやってきた〟と言った。(4)

ここでは、呉継岳氏が、中国華南の貿易港であり、潮州地域の中心的貿易港でもある汕頭から、そこが歴史的に東南アジアとの間に形成した交易・交通網を通して容易にタイに移民したこと、そして、バンコクに移って以降、都市の雑業から始まり、サービス業、商業へと従事していく過程が描写されている。

これをさらに遡って、一七世紀にまで及ぶ時期のタイ（シャム）に向けての移民の歴史を概観すると以下のようになろう。

一七世紀以来、潮州系華人がとくに大量に暹羅（シャム）に移民・移住したのであるが、この時期は丁度朝貢貿易関係が隆盛となった時期と対応している。清朝と暹羅との国交は、順治九年（一六五二年）に始まり、この年初めて暹羅（アユタヤ朝）は中国に入貢し、以降一七八六年バンコック朝に交替し、咸豊二年（一八五二年）に至るまで、合計五十回近くの朝貢をおこなった。中国への朝貢使節の派遣は三年一貢と規定されているが、乾隆末期の一七八九年から、停止直前の道光三十年（一八五〇年）までの期間の朝貢一覧表（表1参照）から見ると、平均二年一貢と規定よりも多い。また、暹羅に対して中国は冊封使を派遣せず、朝貢・冊封関係としては完全では無かったにも拘らず、中国との距離が暹羅と中国との距離より近く、かつ朝貢・冊封関係が完全である越南より朝貢が多いことに目を引かれる。

何故このように暹羅と中国との朝貢が多かったのかという理由として暹羅米の中国への輸入があったと考えられる。即ち、康熙六十一年（一七二二年）から開始された暹羅米の輸入が、中国の華南経済との関係において重要な食糧政策となったからであった。折柄、中国では華中地域において米価の騰貴があり、それを鎮めると同時に、輸入米穀を販

表1　対中国朝貢使節派遣年比較表

	朝鮮	琉球	ベトナム	暹羅
一七八九年（乾隆五十四）	○		○	○
一七九〇年（〃　五十五）	○	○	○	○
一七九一年（〃　五十六）	○		○	○
一七九二年（〃　五十七）	○		○	○
一七九三年（〃　五十八）	○	○	○	
一七九四年（〃　五十九）	○			
一七九五年（〃　六十）	○	○	○	○
一七九六年（嘉慶一）	○			
一七九七年（〃　二）	○	○		○
一七九八年（〃　三）	○	○		○
一七九九年（〃　四）	○			○
一八〇〇年（〃　五）	○	○		
一八〇一年（〃　六）	○			○
一八〇二年（〃　七）	○			
一八〇三年（〃　八）	○		○	
一八〇四年（〃　九）	○			○
一八〇五年（〃　十）	○			
一八〇六年（〃　十一）	○	○		
一八〇七年（〃　十二）	○	○		
一八〇八年（〃　十三）	○	○		
一八〇九年（〃　十四）	○		○	
一八一〇年（〃　十五）	○			○
一八一一年（〃　十六）	○	○		○
一八一二年（嘉慶十七）	○	○		○
一八一三年（〃　十八）	○	○	○	○
一八一四年（〃　十九）	○	○		○
一八一五年（〃　二十）	○	○		○
一八一六年（〃　二十一）	○	○		
一八一七年（〃　二十二）	○	○	○	
一八一八年（〃　二十三）	○	○		
一八一九年（〃　二十四）	○	○	○	○
一八二〇年（〃　二十五）	○	○		
一八二一年（道光一）	○	○	○	
一八二二年（〃　二）	○	○		○
一八二三年（〃　三）	○	○		○
一八二四年（〃　四）	○	○		
一八二五年（〃　五）	○	○		○
一八二六年（〃　六）	○	○		
一八二七年（〃　七）	○	○		○
一八二八年（〃　八）	○	○		
一八二九年（〃　九）	○	○	○	○
一八三〇年（〃　十）	○	○		○
一八三一年（〃　十一）	○	○	○	○
一八三二年（〃　十二）	○	○		○
一八三三年（〃　十三）	○	○	○	
一八三四年（〃　十四）	○	○		○

一八三五年（道光十五）	○		○							一八四四年（道光二十四）	○								○
一八三六年（〃十六）	○									一八四五年（〃二十五）	○				○				
一八三七年（〃十七）	○		○	○						一八四六年（〃二十六）	○		○						
一八三八年（〃十八）	○		○		○					一八四七年（〃二十七）	○		○						
一八三九年（〃十九）	○		○							一八四八年（〃二十八）	○		○		○				○
一八四〇年（〃二十）	○									一八四九年（〃二十九）	○		○		○				
一八四一年（〃二十一）	○		○							一八五〇年（〃三十）	○		○						
一八四二年（〃二十二）	○		○																
一八四三年（〃二十三）	○																		
計	○																		
	六二回	四四回	一九回	三一回															

（出典）John King Fairbank and Ssu-yü Teng, *Ch'ing Administration: Three Studies*, Cambridge, Mass., 1960, pp. 167～168.

売して財源の補助に当てるという目的にも沿うものであった。康熙六十一年六月九日に上諭が下る。

諭曰。暹羅国人言其地米甚饒裕、価値亦賤。二三銭銀、即可買稲米一石、朕諭以爾等米既甚多、可将米三十万石、分運至福建・広東・寧波等処販売。彼若果能運至、与地方甚裨益。此三十万石米係官運、不必収税[5]

このように暹羅米は朝貢品の中に含まれると共に、独立した輸入品としてこれ以降商船による交易がおこなわれる。そしてこの暹羅からの商船貿易は、朝貢船が入港を定められた広州にではなく、むしろ厦門や寧波に多く入港しており、かつ、これを担った商人は、華人商人であった。中国側の米需要に応じた交易がなされたことを窺うことができる。但し、一八世紀中葉になると、厦門商人による暹羅米の輸入は減少し、潮州商人にとって替わられるようになった。米の輸入が恒常化し、貿易利益が減少したため厦門商人はより利益が多い中国沿海交易に集中し、それに代り、暹羅移民と関係が深い潮州商人が米輸入を担うようになった。[6]

このように、初期にはシャムとの関係が強かった福建グループと広東グループは、前者が中国沿海交易を中心とする活動に移行し、後者がマカオ貿易や広州貿易を中心とする西洋諸国との交易に重点を移行させたため、潮州系がシャムにおける移民を背景に関係を強化させることになったと考えられる。そしてこれは、朝貢貿易の中における米貿易から、私人貿易における米貿易の比重の増大という変化を背景に進行した。

二　タイの華人グループ

タイにおける華僑の規模を正確に示すデータは十分ではない。何故ならば、統計数字は華僑の社会的規定と密接に関連しているからである。

タイ政府国家研究院の華僑問題小委員会の推計値は、一九七五年の時点では、約四四〇万人であるが、これは「華僑」、「華人」、「華裔」全体を含み、当然二重国籍も含めた数字であろう。従って、国内的規定による、「華僑」は中国国籍を保留している者で、その旨を登録している者に限るということになれば、人数は極端に減少する。また、華僑で帰化し、タイ籍を取得した者は、それ以後華僑の資格を失うのであり、タイの国籍法が地縁主義に基づいているため、国内で誕生した子女はすべてタイの国籍を取得する。このような算出方法に従うならば、新たな移民が無いという状況の下では、死亡人数のみが減算されることになり、華僑の人数は次第に減少することになろう。

従って、人口統計の数字自体の変化を追うことのみによって華人社会の実像を捉えることは困難であり、むしろ華人社会内部の結びつきの特徴を検討することが重要となろう。

暹羅における華人社会を出身地方別に見るために、まず方言グループの分類に基づいて勢力比を概観すると、

潮州グループ	56％
客家グループ	16％
海南グループ	12％
広東（広州）グループ	7％
福建グループ	7％
その他	2％

以上の分布となり、潮州系が圧倒的に多い。(7)

これらの方言グループは、それぞれがまとまって或いはそれぞれの内部に幾つかの小グループとして地縁的に結合し、会館を組織した。一八七七年の広肇会館の設立を始めとして、潮州会館、客属会館、海南会館、福建会館、江浙会館、台湾会館の合計七大会館が設立された。

各グループは職業的にもそれぞれに特定の業種に集中する傾向がある。潮州グループはその量的な規模から言って多種に亘っているが、タイの主要な二大輸出品である米と木材について、精米業（火碾）と製材業（火鋸）を独占している。また、材木加工業も多く、金融業や輸出入業にも影響力は圧倒的に強い。(8) 客家は百貨店など、海南はコーヒー店や材木加工業、広東（広州）グループは、レストランや機械修理業、福建グループは輸出入やゴム栽培、江浙グループは家具製造、台湾グループは工業企業経営などに集中している。

これらの職業グループは、業種毎に同業公会を組織し、会館という地縁的組織と共に、華人社会の二大結合紐帯を

形成していた。更にこれらに加えて同族の結合組織がある。そして、同業公会に見られる経済的結合は、それら相互の利害関係を調整する機関として、中華総商会を機能させている。これら諸組織につき、バンコクの華字紙『新中原報』の総編集である呉継岳氏は、一九八二年に以下のように回想している。

タイの潮州人については、誰もが皆その歴史は最も古く、人数が最大であることを知っている。最も少なく見積っても二〇〇万人を下らず、財力が豊かであることは、その他の華僑グループがはるかに及ばないところである。しかし、人材を育成するための学校の創設ならびに会館組織の団結力については、むしろ広東・客家に後れをとっている。辛亥革命が成功し、満清朝廷が覆えされた時期に、広肇グループによる明徳学校、客家グループによる進徳学校が相継いで創設された。潮州グループの中にも私立学校は出現したが、公立学校は持たなかった。会館組織についても同様である。……

一九三二年から三六年にかけて、陳守明が二期連続して中華総商会の主席を務めたとき、華人学校の連合運動会を主催し、中華中学を創設し、光華堂を建設した。また、巨資を投じて『華僑日報』を引き継ぎ、『華僑日報』を国内十大紙の一つに発展させ、引き続いて南京政府によって中国内外の十二大紙の一つに数えられた（今一つの海外大新聞は、シンガポールの『星洲日報』である）。陳守明はまた中国から駐タイ国商務専門委員に任命されており、タイの華僑の中でも高い地位を占めていた。

この時期には、タイの大潮州グループの中に有力な指導層が出現した。主要な人物は、蟻光炎・陳景川・廖公圃・鄭子彬・余子亮などであり、彼らは潮州グループのために一仕事をしようとした。すなわち、潮州グループの主導権を確立しようとした訳である。彼らの計画では、まず、一九三六年一〇月、中華総商会の改選に際し、

対立候補を立てて勝利を収めた。蟻光炎氏が中華総商会主席に在任中（一九三七―三八年）、一方では潮州グループの最高機関である〝潮州会館〟の設立を主倡すると共に、多くの潮州系華僑の支持を集めて、〝潮州米業平糶公司〟を組織し、潮州・汕頭に米を運搬し、安い値段でそれを販売して貧困な人々を救済しようとした。(9)……

一九三七年七月中国で対日抗戦が発生した時には、タイの華僑の大団結を促進し、潮州会館の準備も積極的となった。陳景川ら五一人を発起人に推し、蟻光炎・陳景川・陳守明・蕭介珊・頼渠岱・蔡楽斯・曽仰梅ら七人を準備委員に、蟻光炎を主席に選び、場所として〝大夫第〟を選定した。大夫第は、泰国第五代皇帝が〝二哥豊〟鄭智勇に下賜した私邸であり、二哥豊は既に他界していた。潮州グループの統一組織を作ること、しかもその最高機関として〝泰国潮州会館〟は一九三八年二月一四日に登記の批准を受け正式に成立した。会員総会において、陳景川を主席に、廖公圃を副主席に、蟻光炎を財政担当に、余子亮を秘書に任命し積極的に会務を展開した。最も特筆すべき仕事としては、潮州・汕頭への米穀の運搬・販売及び救国工作の秘密指導・救国公債の発行などであった。(10)

ここにおいて呉継岳氏は、タイにおける華人社会の中心に潮州集団が位置するようになった経緯と、その結合の組織的表現である潮州会館が多岐に亙る活動をおこなって来た様子を描写している。

次に、客家系の組織である客属会館、さらに福建会館について、また、海南島出身グループの組織である瓊州会館、ならびに江蘇省・浙江省出身者の組織である江浙会館について、それぞれが持つ形成過程の特徴に関し次のような描写がなされている。

〈客属会館〉

タイの客家は、一〇〇年余り以前、バンコクで商業を営んでいた。多くは小規模な二三流の商業で、洋雑貨店が最も多かった。客家人の多くは手工業に従事しており、製靴・銀細工・製縫・理髪業に多かった。第一次大戦（一九一四―一九）の期間、客家は二三流の商業区である三聘街に進出し、一流の商業区である嵩越路には輸入業ギルドを開設し、日本製品の輸入卸売を始めた。多くの人が富を得たが、すでに五〇年の歴史を持つ大華百貨公司の創設者熊幼霖氏も、嵩越路で宏興隆輸入店を始め大いにもうけた一人である。第二次大戦の六七年間にわたり、客家の人々は小型の手工業から工場経営へと発展する機会を得た。顕著な例は織布工場・衣服工場である。

近三〇年来、客家の人々の工商業は一層発展し、財富も蓄積された。工場経営もかつて皮革・紡織などに限られていたが、現在では製糖・鋼鉄・プラスチック・金属・衣服・石油・石鹸・製靴・印刷・化粧品・自動車部品など数十種に及び、大規模なものは億バーツ、小型なもので千～万バーツ以上である。大小の工場は数百家に上り、商業方面でも伝統的な百貨店の他に新興の金融信託・宝石・旅行・食堂・レストランなどがある。タイ南部のゴム園・銀採掘業にも広く及んでいる。

現在、タイの客家の社団組織として、バンコクには客属総会の外に興寧会館・豊順会館・大埔会館があり、興寧・豊順会館の建物は総会に比べ更に堂々としている。合艾には客属会館・半山客会館・嘉応同郷会などがあり、その他の各都市の多くにも客属公会が設立されている。総じて二度の大戦がタイの客家の発達を促した。現在客属総会の会員は一万人余りである。(11)

〈福建会館〉

五〇〇年以上も前に、〝三保太監〟鄭和が二八年間に亙り、七回も西洋に下った故事は、海外の僑胞が多く熟悉しているところである。鄭和が福建人であることから、福建人が東南アジアの各地に至った歴史は広東人に比べてより早かった可能性もあり、人数もまた広東人よりも多かったかもしれない。最大はインドネシアであり、次いでビルマ・シンガポール・マレーシア・フィリピンである。タイにおける福建華僑の人数はこれらのうち最少ではあるが、しかしその歴史はむしろはるかに古い。二四〇～二五〇年前、鄭王（昭）の前に、既に福建人呉陽は、タイ南部の宋卡で王を称していた。現在宋卡府には〝呉王〟の遺迹があり、福建僑胞もタイ南部の宋卡や普吉などの都市に多い。……

蕭仏成氏が『華暹新報』の主幹であったとき、タイ語で評論を発表し、第六世皇帝と通信をしたこと、また、中国の名著『三国演義』をタイ語に訳しタイの朝野の歓迎を受けた人が即ち蕭仏成氏である。

辛亥革命が成功した後、海外の華僑が社団を組織し、学校設立の気運が盛んになったとき、蕭仏成氏と劉聰敏氏らは、一九一二年にバンコク噠叻仔の〝順興宮〟神廟にあった〝福建公所〟を福建会館に改組し、かつ正式に政府への登記をおこなった。蕭氏は初代会長に推され、同時に福建会館内に培元学校を創設した。最初の学生は数十名にすぎなかったが、福建会館の前身である〝福建公所〟の歴史は〝広肇別墅〟に比べてもはるかに古い。一八七二年に設立され、今に至るまで一〇六年を経過している。しかし、当時は人数も多くなく、とりたてて活動もなく、華僑グループの注意を引かなかったのである。(12)

〈瓊州会館〉

一八五八年に海口が開港場となってから間もなく、海南人が外国に行く際には帆船を使うことが少なくなった。彼らは海口から香港へ行き、香港から東南アジアの各地に移動したからである。二〇世紀に入ると太古輪船公司〔Butterfield and Swire & Co.〕が海口に支店を開設し、海口から直接にバンコクやシンガポールに移民できる機会が増加し、タイに来る海南人は次第に増加したが、婦女の数は極めて少なかった。成文上の禁例があったわけではないが、婦女の海外移住は禁止されていた。辛亥革命が成立し民国が成立すると、この非成文の禁例も取消され、海南島の婦女も海外に夫を尋ねて移動し始めた。

およそ九〇年前に、海南人は挽叻に〝昭応廟〟を建設し、そこに〝瓊州公所〟を付設して、海南人のバンコクにおける組織の雛型を作った。瓊州公所が成立した当初には、何ら組織章程が無く、ただ毎年の祭事に海南華僑の資産家や有力者が集まり、海南華僑の公益を集議するのみであった。二〇世紀初頭に至ると、瓊州公所を指導する海南華僑の指導者には、馮裕源・雲竹亭・符福臨・馮爾和など十数人が出現した。一九〇七年に孫中山先生がタイを訪れ革命を倡導した後、海南華僑も南溟商会・会文社・瓊島会所などの新組織を作ったが、数が多く力量は分散的であった。全体の海南華僑の公益福利ならびに教育事業の創設については、潮州・広東・客家にはるかに後れをとっていた。(13)

〈江浙会館〉

第二次世界大戦前、タイの江浙人は非常に少なかった。木器業を営み、比較的有名な〝上海家具〟は戦前はよく

知られていた。私〔呉継岳氏〕が五二年前にバンコクに来たとき、すでに〝江浙会館〟の組織は存在していた。当時の会長は、木器業を営む上海人の王明福氏であった。王明福氏は華僑の公益事業に熱心で、中華総商会が黄河水害の義捐をおこなったとき、彼は江浙会館会長の名義で加わり、資金援助で大いに活躍した。後に、中華中学と光華堂のポストも彼が担当した。王明福氏を継いで江浙会館の首席に任ぜられたのは沈養園先生であり、彼らは日頃密接に接触を保っていた。[14]

これらの華人集団を統括し、経済的な活動のみならず、ときには政治的な発言をもおこない、タイにおける華人集団全体の利害を代表した組織が中華総商会であった。呉氏は次のように述べている。

〈中華総商会〉

一九〇四年に公立の天華医院が設立された後、タイの僑社の風気が日増しに開かれ、革命運動も次第に起こるようになった。華人日刊紙の『漢境日報』もすでに創始されていた。天華医院の創設人である高暉石・陳立梅・伍淼源などの数人は、香港にはすでに華商総会があり、シンガポールには中華総商会があることに鑑みると、タイには華僑が多く、時流としても商業団体の組織が必要であり、感情を通じ合い、知識を交換する必要があると主張した。ここにおいて、中華総商会を組織することが積極的に推進された。準備期間中に伍淼源氏が他界し、代って子息の伍佐南氏が発起人に加わり、また当時六世皇帝の信を受けていた廖葆珊氏も創設人に加わった。

陳守明氏が中華総商会の首席を二期に亙って務めた期間（一九三二年一〇月～一九三六年一〇月）、創建した組織も多く、出費も最も多かった。聞くところでは、当時で五万バーツを使い、中華中学と光華堂を完成させた

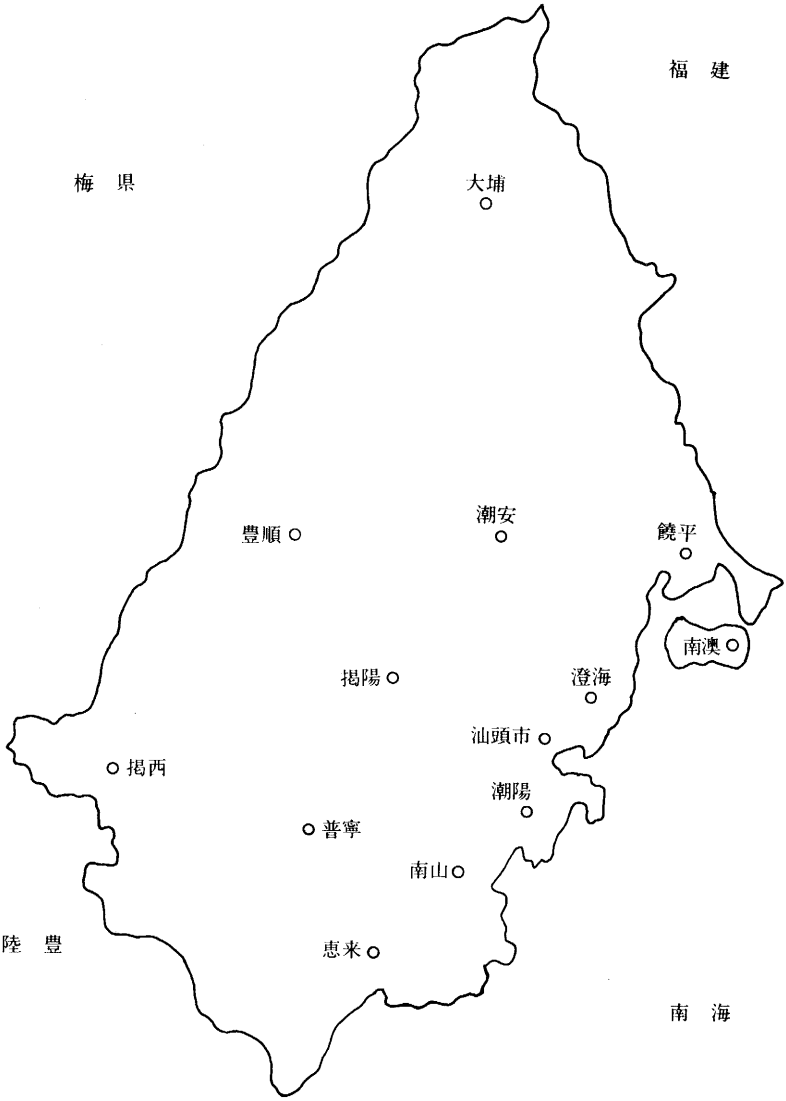
他、華校連合運動会を主催し、大いに教育と体育に力を入れた他に、会務展開にも力を費やした。その結果、会員は数百人から二〜三千人に増加し、中華総商会は華僑団体の中で指導的な地位を確立し、タイ華僑の最高機関となった。一九三六年五月、中国政府は大規模な代表団をタイに派遣し、タイとの国交の可能性を探った。(15)

タイの華人社会は、それをシンガポール、マレーシア、ビルマ、インドネシアなどの華人社会と比較すると、現地社会と同化が進んだと言われている。事実、文化人類学の家族研究に拠るならば、移民先の民族との通婚や共住がおこなわれていることは事実である。但し、それを中国の側から、とりわけ中国式の社会経済活動の文脈から見てみるならば、とりわけ商業活動の側面において、強固なギルド的な結合を持つ中国式商業活動が見られる。バンコクの商業センターであるヤワラート及びその近辺チャオプラヤ河辺に集中する米穀問屋街は、その市場管理、信用経済、経営形態のいずれをとっても、伝統的中国商業の形態を維持していると捉えられる。その意味では、会館を中心に組織された商業活動の面から見る限りにおいては、同化というよりも、中国的経済活動の原理がタイに導入されたとも見做すことができ、華人社会がタイにおいて比較的商業に特化した位置を占めたことによって〝同化〟と〝共生〟が促進されたとも言えよう。従って、地域農村社会における状況とは異なり、タイの商業界にあっては、在来の中国商業が維持されていると考えることができる。

三　潮州系華人組織

タイにおける華人組織は、比較的規模が大きいもので、バンコクに一八〇、それ以外に二二〇、計四〇〇程度があ

地図 1　潮州全図



る。これらの華人組織の中で潮州系の影響力は極めて強いと言えよう。そして、潮州系の組織の中心に潮州会館がある。また、一九四〇年代後半に相継いで成立した出身各県の同郷会がある（地図1参照）。それらは、

潮安同郷会
潮陽同郷会
揭陽会館
普寧同郷会
澄海同郷会
豊順会館
大埔公会
饒平同郷会

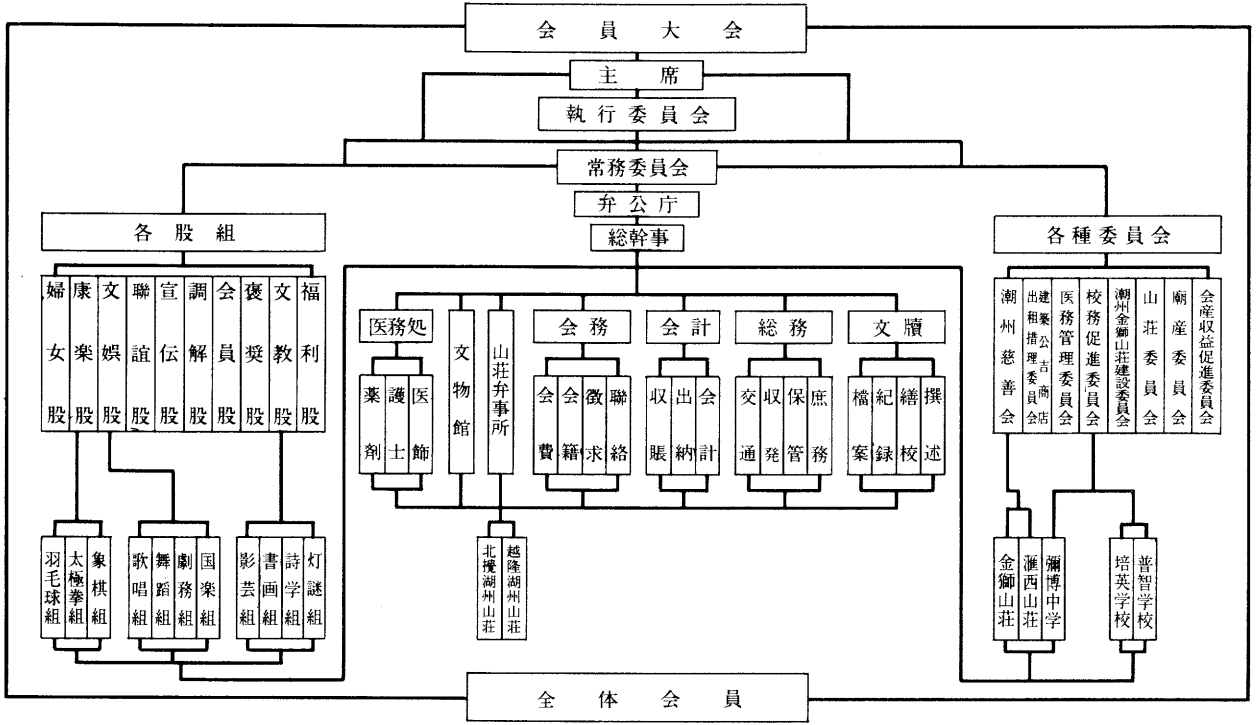
などであり、恵来・南澳の同県会も設立されている。[16]

潮州会館の組織系統は図1のようである

潮州会館は一つの行政的組織の機能を備えており、各種委員会は、財政事業・山荘（墓地）・学校・医院などに携わっており、それを運営する事務機構も備わった執行機関である。また、会館活動の中に、福利組、娯楽組、婦人組などの親睦活動、文化活動も含まれている。

これらの会館活動その他に功績を残した人物は、会館志の名人伝の中に記録される。いま、名人を記載する後掲の五つの刊行物のうち1～4までの名人伝にある人物を潮州の出身県別に分類すると表2のようになる。一覧表のうち、

図 1　泰国潮州会館組織系統図



（出典：『泰国潮州会館成立45周年紀念特刊』曼谷，1983年）

表 2　泰国潮州系華僑名人一覧

	出所・頁数
〈潮陽県〉	
周朝宜	泰46，45年38，
周鑑梅	泰46，88，45年22
陳純	泰46，45年11
△陳弼臣	泰44，40年23，45年3
○陳栄煊	泰15，46，72，76，87，90，40年3，45年9
馬燦峯	30年22
楊奕豪	45年66
李光隆	45年42
○林渭濱	泰46，88，30年46，45年17
◎郭鵬	30年 39，40年12
連吟嘯	30年54
許炳財（勝前郷）	45年63
蕭智生（珠呈郷）	45年57
張朝江（港頭郷）	45年43
張漢増（港頭郷）	45年40
張錦城（港頭郷）	45年58
陳栄捷（西岐郷）	泰46，90，92，45年37
○◎△鄭午楼（沙隴郷）	泰45，72，30年43，40年 1，45年1
鄭子彬（沙隴郷）	30年 7，40年18
鄭景雲（神山仙瑤池郷）	30年2
馬陳茂（成田中央郷）	泰46，90，45年12
李叔亮（簡樸郷）	30年18
劉栄坤（仙坡郷）	45年44
劉錫如（仙坡郷）	30年31
林炳南（仙港新元郷）	45年54
林学舞（新元郷）	45年41
連楚南（第 9 区大布郷）	45年62
〈澄海県〉	
蟻玉音	泰72，78，45年87
蟻光炎	泰68，30年25，40年16
△許朝鎮	泰57，45年25
△黄作明	泰9，72，40年22，45年4
呉祥安	30年19
蔡徳名	泰9，45年89

張源耀	45年104
陳暑木	30年57
陳梧賓	30年14
鄭俊英	45年15
鄭開修	30年11，40年14
○廖公圃（横隴郷）	40年24
蘇壎　（信寧郷）	45年90
○◎蘇君謙（信寧郷）	泰9，15，72，90，30年37，47，40年1
陳順義（上岱美郷）	45年92
陳松亮（建陽郷）	45年56
陳鎮庭	30年60
陳沢栄（華埔郷）	30年20
◎鄭寄雲（冠山郷）	30年3，40年8
林年青（樟林郷）	45年95
林万松（渡亭郷）	泰54，45年74
林伯岐（蘇北区水南郷董抗村）	30年13
◎宋麟輝（樟東区）	泰57，78，82，45年93
李君玉（蓮陽郷）	30年61

〈普寧県〉

王保文	40年15，45年8
許智永	45年86
陳祉光	45年100
羅済賢	45年98
◎杜木秋	泰52，77，45年52
方徳伝	45年61
王済達（仙洞郷）	泰52，45年67
王慕能（丘塘郷）	30年21
許興桐（竹頭郷）	45年60
○呉修益（塗洋郷）	泰9，90，45年18
張伯念（弥高郷）	泰50，30年8
陳少明（蓮塘郷）	泰52，45年81
△陳克修（赤水郷）	泰9，52，80，40年5，45年24
李振坤（志古寮郷）	泰81，45年102
◎李之綿（鉄山）	泰75，30年40，40年13，45年7
荘舜廷（果隴郷）	泰50，30年34
鄧鎮洲（梅林郷）	45年96

〈揭陽県〉

呉喜然	45年59
◎○黄同青	泰9，49，72，87，45年80
陳長茂	泰49，45年78
陳卓豪	45年64
梁潤潮	45年51
盧楚高	泰49，45年45
鄒振謨	泰49，45年94
許春裘（潮臨郷）	30年9
洪鑑澄（棉湖郷）	30年15
黄継盧（観音山郷）	泰82，45年53
◎○徐準田（西門外大良崗郷）	泰49，90，45年23
徐居然（白石郷）	30年24
○陳呉順（囲厝溝郷）	45年16

〈潮安県〉

丘国藩	泰43，45年99
黄景雲	泰41，45年73
張木鴻	45年55
◎張蘭臣	泰8，68，30年5，40年9
陳紹勲	45年14
頼得	45年88
○李其雄	30年44，40年6
林維高	30年17
廖少賢（下東津郷）	泰42，45年21
○謝慧如（秋水郷）	30年45
陳鋭攀（東鳳郷）	泰43，45年35
鄭智勇（棋頭郷）	30年23
頼渠岱（鳳洋郷）	30年12，40年17

〈饒平県〉

呉光偉	泰67，45年70
呉玉音	泰9，67，78，90，45年32
蔡棲虹	泰9，66，78，88，45年30
張世明	泰66，78
陳守明	30年16
余子亮	30年35，40年19
許遂楚（後溝郷）	泰79，45年82

張昭栄（隆城郷）	泰67，75，87，45年49
○陳振敬（隆都前渕郷）	泰70，30年41，40年20
陳繹如（隆都宅頭郷）	30年33
陳景川（隆都区西洋郷）	30年1，40年7
△潘守仁（黄岡郷）	泰67，45年29
○◎金崇儒（隆都後溪郷）	泰9，65，72，87，90，40年2，45年6
〈豊順県〉	
丘細見	泰9，19，64，87，45年20
呉剣鋒	45年101
羅自強	45年69
丁家駿	泰9，21，61，87，45年75
蔡初基（湯坑市金湯郷）	泰9，61，45年76
張自吟（湯坑郷）	泰62，45年77
△香陳答（湯坑佐嶺郷）	泰64，45年28
鄭明如（九河郷）	泰9，45年19
〈恵来県〉	
陳松池	泰78，45年46
楊海泉	泰78，45年33
胡栄昇（京隴郷）	45年84
謝育僑（華林郷）	45年85
陳玉泉（田心郷）	45年103
陳松善（田心郷）	45年47
林木清（獅子郷）	45年48
〈揭西県〉	
丘書亮（上隴郷）	泰49，87，45年65
李建南（灰寨郷）	泰9，13，49，90，45年79
汪文盛（美徳郷）	泰102，45年97
〈大埔県〉	
丘清忠	45年72
△廖梅林	泰59，45年26
◎何乃創（大麻区恭洲郷）	泰5，8，13，21，45年27
〈南澳県〉	
林孝	45年34

◎印は潮州会館の主席、○印は副主席の任に当った人物であり、△印は名誉主席、名誉顧問である。

1　『泰国潮州会館三十年』仏暦二五一一年（「30年」と略記）

2　『泰国潮州会館成立四十周年暨新館落成掲幕紀念特刊』一九七九年（40年）

3　『泰国潮州会館成立四十五周年紀念特刊』（45年）

4　『泰国社団名人』二五二五年度、羣力出版社（泰）

5　陳振泰『泰国僑団史略（上）』四海出版社、一九七五年

この潮州系の指導者の出身を見ると、潮陽、澄海、普寧、揭陽、潮安の順に多く、沿海地域並びに内陸の中心部からの出身者が多い。主席、副主席を担当した人物の出身地もやはり沿海地と中心部が比較的多い。これも移民元の同郷その他の社会関係が維持されている結果であると見做せよう。

四　潮州における人口と移民

中国史上、一九二〇年代は国内、国外共に移民がピークに向った時期である。移民の数量的把握は困難であるが、この時期、華北から東北地方への移民と華南から東南アジア地方への移民とが大規模におこなわれた。潮州地方の人口の変化と移民との関係を見ると次のような傾向が浮んでくる。

まず、潮州地方からの移民数を見ると表3となる。

この移民統計表から明らかになる点は、

表 3　潮州における海外移民統計表

年　　別	出国人数	入国人数	出入差人数 ＋出超 －入超
1869（同治 8年）	20,824		
70（〃 9年）	22,282		
71（〃 10年）	21,142		
72（〃 11年）	37,013		
79（光緒 5年）	17,176		
95（〃 21年）	91,100		
1904（〃 30年）	103,202	86,454	＋16,748
05（〃 31年）	93,645	79,298	＋14,347
06（〃 32年）	102,710	92,704	＋10,006
07（〃 33年）	144,315	101,635	＋42,680
08（〃 34年）	112,061	92,292	＋19,769
09（宣統元年）	115,499	112,608	＋ 2,891
10（〃 2年）	135,980	108,363	＋27,617
11（〃 3年）	130,900	115,562	＋15,338
12（民国元年）	687,733	682,261	＋ 5,472
13（〃 2年）	694,909	682,755	＋12,154
14（〃 3年）	667,742	682,722	－14,980
15（〃 4年）	792,426	813,946	－21,520
16（〃 5年）	855,145	811,671	＋43,474
17（〃 6年）	770,868	697,868	＋73,000
18（〃 7年）	790,528	754,821	＋35,707
19（〃 8年）	906,013	839,888	＋66,124
20（〃 9年）	784,036	724,748	＋59,288
21（〃 10年）	917,312	879,434	＋37,878
22（〃 11年）	904,745	877,613	＋27,132
23（〃 12年）	713,137	665,563	＋47,574
26（〃 15年）	169,700	120,000	＋49,700
30（〃 19年）	123,724	94,726	＋28,998
31（〃 20年）	80,202	81,962	－ 1,760
32（〃 21年）	36,824	70,864	－34,040
33（〃 22年）	44,858	59,722	－14,864
35（〃 24年）	50,717	19,107	＋31,610
37（〃 26年）	10,884	1,715	＋ 9,169
38（〃 27年）	67,341	29,323	＋38,018
39（〃 28年）	82,783	20,550	＋62,233
44（〃 33年）	20	452	－ 432
45（〃 34年）	65	87	－ 22
46（〃 35年）	2,649	2,555	＋ 94

（出典：『潮州志』戸口志，統計表，18～20頁（『潮州志匯編』956～957頁））

1　中華民国時代が開始すると同時に移民が急増し、一九一〇年代末から二〇年代初にかけてピークに達している。

2　移民のピークは同時に帰国者の増加を示しており、移民は必ずしも出国の一方向のみではなく、出国と帰国との両方向の増大を意味している。

移民の原因を、中国の側から推し出す要因と、移民先が吸引する要因とに分けてみると、この時期の移民は、移民先即ち東南アジアの側の吸引力が勝っていると見做すことができよう。この時期、東南アジア経済は、第一次と第二次の世界大戦の戦間期の経済的好況の影響を受けて拡大しており、ゴム、錫、米など東南アジアの主要生産物の輸出が拡大している。(17)

また、二〇年代に次ぐ移民のピークは一九四〇年代に訪れる。一九四〇年と四六年との戸数・人口数の比較を普寧県において見ると表4のとおりである。この両年の比較に拠ると、四〇年に比較して四六年は、各郷の戸数・総人口・男女人数共に増加している。これは、第二次大戦における日本軍の東南アジア支配と関係し、その意味では、移民先において推し出す要因が強く働いていたと見ることができよう。

これら二つの時期の検討の中で、前者の一九二〇年代の移民については、移民数の増大のみならず帰国者数も増大していることから、移民の原因としての二つの要素即ち、推し出す要因と吸引する要因という要素に加えて、或いは両者の複合として、第三の要因即ち、移民元を移民先との交流・交渉の増大による両者の結びつきの強化、ネットワークの形成という側面を見ておく必要があろう。

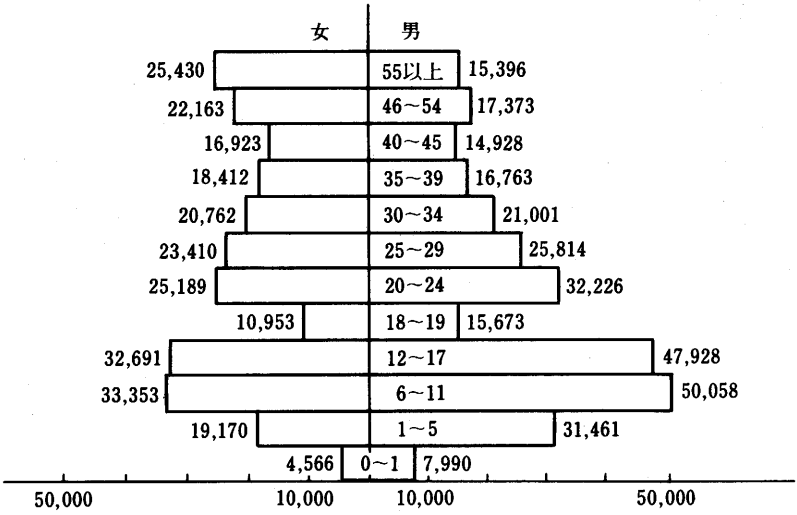
この交流・往来の増大は、移民の男女比とも関係し、移民の性格を規定するものとなっている。即ち移民先定住型か出稼ぎ型であるかという区別であり、中国の移民は出稼ぎ型が多いという点の歴史的推移の検証である。一九四六

表 4　普寧県の人口構成

郷名	1940年				1946年			
	戸数	男数	女数	一戸平均数	戸数	男数	女数	一戸平均数
普城郷	3,879	11,638	10,264	5.6	4,199	11,761	9,960	5.2
仰山郷	2,499	—	—	6.1	2,499	7,506	6,520	5.6
和平郷	2,663	—	—	5.9	2,753	7,555	6,671	5.2
振東郷	1,008	2,855	2,632	5.4	2,592	6,701	5,854	4.8
和安郷	1,448	4,178	3,803	5.5	2,551	7,949	6,241	5.6
十二郷	1,656	4,581	4,032	5.2	1,708	4,068	3,767	4.6
十三郷	3,258	8,928	8,033	5.2	3,339	8,661	8,136	5.0
四山郷	1,829	6,436	5,497	6.5	1,925	5,854	5,357	5.8
庄河郷	2,746	8,364	7,447	5.8	3,015	8,596	7,614	5.4
新貢郷	2,303	7,271	6,646	6.0	2,353	6,849	6,327	5.6
五美郷	3,347	11,166	10,201	6.4	3,489	10,418	9,683	5.8
陸和郷	3,178	9,744	8,773	5.8	3,550	9,289	8,316	5.0
弥鳥郷	2,910	12,319	9,391	7.5	3,094	10,044	8,310	5.9
果隴郷	1,540	5,968	4,614	6.9	1,631	5,707	4,372	6.2
六八郷	3,777	13,115	10,962	6.4	3,622	9,714	8,626	5.1
十赤郷	2,434	8,759	7,474	6.7	2,554	6,776	5,944	5.0
秀郭郷	3,432	13,291	11,216	7.1	3,234	10,828	8,875	6.1
南泗郷	2,309	8,401	7,263	6.8	2,282	7,627	6,270	6.1
馬四郷	2,528	8,249	7,958	6.4	2,577	6,998	6,149	5.1
新斗郷	2,226	8,292	7,224	7.0	2,452	6,917	6,057	5.3
鯉和郷	3,671	14,800	11,888	7.3	2,809	9,262	7,277	5.9
梅峯郷	2,714	11,882	9,472	7.9	2,991	10,393	8,948	6.5
六仁郷	2,622	9,714	8,059	6.8	2,836	9,650	7,325	6.0
安渓郷	1,920	8,106	6,755	7.7	2,107	8,581	6,743	7.3
徳安郷	3,506	9,868	8,854	5.3	3,979	10,981	9,572	5.2
大四郷	3,169	10,030	8,959	6.0	3,361	10,226	8,223	5.5
青碧郷	1,223	3,850	3,411	5.9	4,250	11,503	9,864	5.0
埠塘郷	4,210	14,977	12,447	6.5	5,317	14,846	13,340	5.3
橋柱郷	2,786	9,240	7,921	6.2	2,556	7,838	6,601	5.6
十八郷	2,986	9,839	8,682	6.2	2,864	7,771	6,393	4.9
湯蓮郷	4,408	14,272	12,706	6.1	4,486	11,794	9,862	4.8

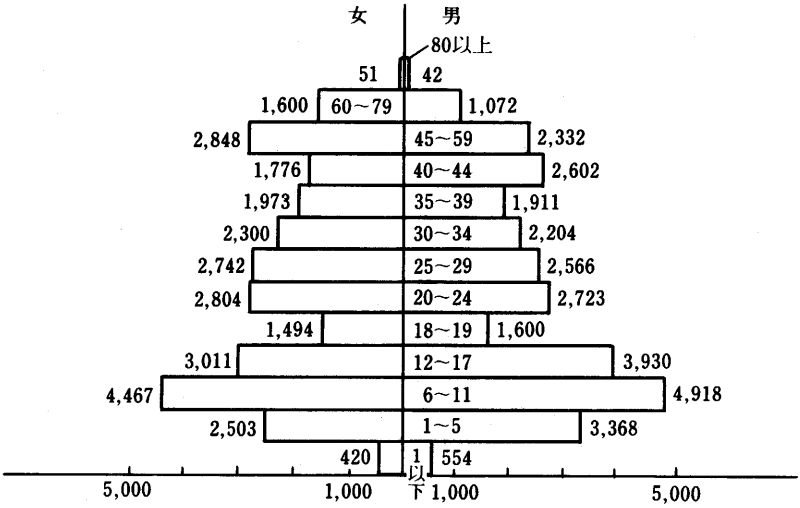
（出典：『潮州志』戸口志，郷鎮戸口，27～29頁）

図 2　1946年，普寧県における年令別男女人口構成



（出典：『潮州志』戸口志，統計図表，15～16頁）

図 3　南山管理局の年令別男女人口構成



（出典：同上，20頁）

年における普寧県ならびに揭西県南山管理局の年令別人口構成は図2・図3となる。

この年令別人口構成の特徴は、二〇歳後半から四〇歳にかけて人口が減少している点、また、男女差が必ずしも大きくない点にある。両者は移民社会としての特徴を示しており、しかも移民先定住型の特徴即ち、家族移民の特徴を示していると考えられる（移民者の男女比は約3.5対1であり女性が他地域より多い）。

しかし、他方南山管理局の人口構成は、一定程度は移民社会として特徴をその男女比における女性数の優位によって示しているが、普寧県に見られるそれ程には顕著ではない。この現象は、かつて陳達が示した、極めて明瞭な移民元社会の特徴とは趣を異にしている。これら両者の差異の拠って立つ原因は直ちには明らかにし得ないが、後者が沿海に位置しているにも拘らず、移民圧力が相対的に少ないと推測されると共に移民元と移民先との交流が緊密になるに従って、移民型社会の人口構成が変化するであろうことは想像に難くないところである。(18)

五　広域商業圏の形成

このように、移民先と移民元との相互関係の緊密化は、従来の関係に比べて、より一層拡大された関係をとりわけ商業・交易の面において形成することになった。そして、この広域通商網の形成によって、それ以前の活動が拡大されると同時に、従来の移民の原因であったとされる移民元の経済的窮乏や政治的不安定さなどという問題は、それ自身独立した原因を構成するのではなく、相互往来の頻繁化によって、旧来の商業関係を前提としながらも、その中に拡大された交易・交流網が形成されることとなる。即ち相互関係の中に従来の移民の因果関係が解消され、拡大され

表5　汕頭各業商号数および資本総額表

業別	商号数	資本総額（単位一〇〇〇元）	備考
匯兌莊	五八	一四、五〇〇	平均二十五万元
車務公司	七	二一〇	平均三万元
收找莊	二五六	一、〇二四	平均四千元
輪船公司	二四	七二〇	平均三万元
經紀行	四三	一七二	平均四千元
洋行	一八	七二〇	平均四万元
僑批局	五五	一、一〇〇	平均二万元
南北港行	七〇	七、〇〇〇	平均十万元
蘇廣雜貨	七一	二、一三〇	平均三万元
餉押	二三	四六〇	平均二万元
保險	五一	五一〇	平均一万元
旧貨店	八	二四	平均三千元
五金	一二	一八〇	平均一万五千元
錫器	三	一八	平均六千元
鉄工	三六	七二	平均二千元
銅工	二五	二五	平均一千元
鑄鼎	二	四〇	平均二万元
機器	五	七五	平均一万五千元
南郊	五四	一、六二〇	平均三万元
暹郊	五四	一、三五〇	平均二万五千元
鏡器	一五	一五〇	平均一万元
印務	三三	二六四	平均八千元

建築	一五五	一、〇八五	平均七千元
洋灰	七	七〇	平均一万元
磚瓦	一〇	四〇	平均四千元
杉行	二九	三四八	平均一万二千元
油漆	五	五〇	平均一万元
漆工	二二	四四	平均二千元
信局	九	九	平均一千元
船票局	一〇	二〇	平均二千元
染刷	一六	一二八	平均八千元
棉紗	一六	四〇〇	平均二万五千元
抽紗	二五	一、五〇〇	平均六万元
織衣	一一	四四	平均四千元
綢緞布疋	六六	一、九八〇	平均三万元
土夏布	一三	六五	平均五千元
新衣	三〇	六〇	平均二千元
鉄行	七	一〇五	平均一万五千元
古玩	一〇	三〇	平均三千元
竹篷	六七	一三四	平均二千元
帽廠	八	八〇	平均一万元
影相	一五	六〇	平均四千元
顏料	一三	二三四	平均一万八千元
成衣	五七	五七	平均一千元
旧衣	一八	一八	平均一千元
蔴袋	二一	三一五	平均一万五千元
鐘錶	一四	二一〇	平均一万五千元

金店	三三	三三〇	平均一万元
弾棉	一六	三二	平均二千元
紙行	一〇	一五〇	平均一万五千元
煤炭	一〇	二〇〇	平均二万元
火柴煤油	四一	六一五	平均一万五千元
米行米店	一九八	一、一八八	平均六千元
生菓行	四三	五一六	平均一万二千元
家私木器	一二六	一、〇〇八	平均八千元
皮革	一二	三六	平均三千元
北貨	一九	九五	平均五千元
煉油	二七	五四〇	平均二万元
柴炭	四四	二六四	平均六千元
雑糧	二七	五四〇	平均二万元
西餐雑食	三〇	九〇	平均三千元
餅乾	一三	一九五	平均一万五千元
魚行	二三	一八四	平均八千元
鞋莊	三三	三三〇	平均一万元
瓷器	二四	一四四	平均六千元
文具	二二	一三二	平均六千元
田料	三五	五二五	平均一万五千元
電器	一八	二八八	平均一万六千元
香燭	一七	三四	平均二千元
酒莊	六四	五一二	平均八千元
雞鴨行	九	四五	平均五千元
屠宰	七二	二一六	平均三千元

海味京菓	四九	二四五	平均五千元
生菜行	一一	四四	平均四千元
猪行	八	八〇	平均一万元
薯粉行	一六	一九二	平均一万二千元
洋煙酒	三三	二六四	平均八千元
酒楼飯店	二九	二三二	平均八千元
梅餅	九	五四	平均六千元
麺粉	二一	三一五	平均一万五千元
蛋行	二八	一六八	平均六千元
薬材行	一一一	四、四四〇	平均四万元
各業工廠	六〇	六〇〇	平均一万元
煙茶	四四	一七六	平均四千元
西薬房	三八	一九〇	平均五千元
塩店	二	一二	平均六千元
包餅	一七	六八	平均四千元
麺食店	一七	三四	平均二千元
糖行	三八	五七〇	平均一万五千元
雑鹹	三七	二二二	平均六千元
中薬店	一一四	四五六	平均四千元
臘味	九	四五	平均五千元
搾油	一一	三三〇	平均三万元
乾菓行	三〇	三〇〇	平均一万元
旅舗客棧	一五八	九四八	平均六千元
薬品店	八	四〇	平均五千元
合計	三、四四一	五七、六八四	平均一六、七六三元

（出典：『潮州志』実業志、商業68～71頁）

表6　潮州各県の墟市（市場）・商号数ならびに推定営業資本額（単位大洋元）

県別	墟市数	商号数	推定資本額	備考
潮安	二九	五、二六七	八、七二〇、四〇〇	県城は平均約二千元、その他は約一千二百元
潮陽	二七	二、五六四	三、〇七六、八〇〇	平均一千二百元
揭陽	六一	四、八八一	五、一〇四、八〇〇	県城は平均約一千四百元、その他は約八百元
饒平	三八	二、三五七	二、一四一、九〇〇	黄岡市は一千三百元、その他は約七百元
澄海	二四	二、一六〇	一、七五二、〇〇〇	東里市は一千三百元、その他は約七百元
普寧	五二	一、一三七	一、一三七、〇〇〇	平均約一千元
大埔	四七	二、八五四	一、七一二、四〇〇	平均約六百元
恵来	二二	七八一	五四六、七〇〇	平均約七百元
豊順	一八	二、四八〇	一、四八八、〇〇〇	平均約六百元
南澳	四	五七八	三四六、八〇〇	平均約六百元
南山	一	二三三	一三八、九〇〇	平均約六百元
合計	三二三	二五、二九二	二六、一六五、七〇〇	

（出典：『潮州志』実業志、商業、71頁）

た商業圏の中での相互往来へと変容したと見做すことができよう。

表5・6は、一九三三年汕頭および潮州各県に於ける各業商号とその資本総額の一覧である。

この統計に拠ると、資本額が多い上位の行業は、匯兌荘、南北港行、蘇広雑貨、南郊（越南・馬来亜・荷属各島との貿易）、暹郊（暹羅との貿易）、僑批局（華僑送金業）、収找荘、旅舗客桟、輪船公司、洋行、保険と続いている。これらはすべて、貿易業や貿易金融業並びに貿易関連事業であり、先に見た暹羅との往来の増大もこの商業貿易活動

の拡大と表裏一体の関係にあったことを窺うことができる。この中で資本総額では第五位を占める暹郊の歴史は次のように記されている。

暹商又称暹郊。因貿易地域固定暹羅一地故名。運出貨品与南商大致相同。其始、本合於南商範囲之内。清末間、暹羅華僑擬発展本国航運以免受外商操縦、組織有華暹公司。購置輪船四艘、川行汕頭与曼谷間、商請汕頭南商商号、将運暹貨物一律配載於華暹公司輪船。於是南商中一部配運商号遂脱出、成立暹商公所。華暹公司雖未久即歇業、但暹商公所自爾独立、暹商出口貨品以粗貨低価者居多。営業額較南商減少。民国二十二年間平均毎号毎年営業約四十万元。其時商号共五十四家。総共毎年対暹羅運銷量当在二千万元左右。暹商公所民国二十年間依工商同業公会法、改組為同業公会。復員後再改為暹商運輸業同業公会。所有会員商号三十五年為八十三家。(19)

ここに見られるように、暹羅行は、その出発点において南郊と称される越南・馬来亜・オランダ領インドネシア各島・香港との貿易に従事した行会と活動範囲を共有していたが、暹羅との独立した貿易利益を確立するために、運輸面の強化をおこない、先の表5に見るように、一九三〇年代には南郊に匹敵する力を保有した。暹郊は暹羅の二大輸出品である米と木材とを取扱い、南郊と共に、拡大された華僑経済圏即ち、華南と東南アジアとを商業・交易網で結合した交易圏を形成する重要な担い手であったと見做すことができよう。

総じて、移民が商業と結びつき、移民元と移民先との新たな経済的結合の強化によって、移民先への人的・資金的投資と、移民元への経済利益の還元がおこなわれるようになる。この過程は「はじめに」において示した移民社会に生じた〝変容〟として捉えることができるであろう。

六　華僑送金機関（批業）の発達

汕頭の各業商号の中で最大の資本力を持つ業種は、匯兌莊と称される金融業であり、貿易金融機関の重要性を示している。と同時に、華僑送金業務を取扱う僑批局は第六位であり、華僑が人的往来に止まらず同時に資金の往来をもたらしていた点が注目される（前出表5「汕頭各業商号数および資本総額表」参照）。

華僑送金並びに送金業がいつ頃から始まったのかという点につき、汕頭で一九四〇年代まで送金業を経営した人物による以下のような回憶がある。

紅頭船（外国汽船）が就航する以前には、水客は毎回中国への帰国船の便を利用し、華僑が居住する地域で郷里の親族に宛てた現金を受取る。現地で洋雑貨などの外国品を購入し、帰国した際にそれを売却し、華僑の親族への送金に充当する。処理を容易にするために、各郷の親族に現金引き渡しを依頼されたときに、紙片に家族の姓名・住所・銀額・簡単な伝言を明記し、同時に空覧の紙片を用意して受取人の署名を記し、これを受取証として送金の証拠とした。当時の人は送金を〝寄批〟、送金の返信を〝回批〟と称した。〝批〟の一字は、閩南語・漳州・潮州ともに同源であり、同様に使用されていた。

民国になって以降、この職業は海外の貿易業者の注目を次第に浴びるようになり、また銀首飾業を営む者にも少なからず兼営する者もあったが、後に専業で送金業務を扱う業者が登場し、これを僑批局と称した。民国一七年（一九二八年）全国交通会議において民信局を取締り、民信局の外国郵便取扱いを撤収することを決定したとき、

僑批局については華僑へのサービスに関係していることからこれを残すことを認めた。但し、必ず所在地の郵局に登記させることとし、そこを通して郵政総署に僑批を経営する免状を申請させることとし、あわせて毎年これを更新させるよう規定した。当時南京郵政総局は、〝批〟の字は辞書に無いとして、僑批局を改めて僑匯荘としたが、国の内外はもとより、地方の都市に至るまで、すべて旧説に沿って僑批局と称した。(20)

ここに記されたように、批局（僑批局）は華僑送金を取扱い、貿易業者や金鋪などの兼営や華僑送金専門の僑批局によって営まれている。また、一九二八年に国内の民間郵便業である民信局を取締った際にも、華僑送金並びに郵便業を取扱う僑批局は存続した。

更に、潮州志には、その起源につき次のような記述がある。

溯批業之源起乃由水客遞変。潮州対外交通遠肇唐宋。昔年帆船渡洋一往復、輒須経歳。華僑信款率託寄於常川来往水客。其信函俗名曰批。（潮閩語言同源。閩南至今仍以批称書函）今雖改称曰信、但僑民信款常相聯寄合信款而言仍称為批。其収款人之回信即名回批。水客外洋原無住所、則聯合設置行館以居停、名為批館。此為批業之濫觴。現時批業之登門収寄按址送交、以及回批交還等手続、無一不循水客之旧貫。及輪船航行交通既便、潮人出洋益衆、寄款愈繁。顧水客大多冒険梟桀、時有侵蝕匿交之事。其富厚寄款較大之華僑乃自派人専帯兼収受親友寄託。久之浸成正式営業、而批館之名仍不変也。迨我国加入聯郵公約、政府設立郵政局。其民営帯信者曰民信局。批館属民営而専帯僑批故又称批局、以別乎民郵二者。民国十七年全国交通会議決定取消国内民信局。惟以批局係服務華僑仍許存在。初擬将名称改特種郵寄代辦所、因批業之反対乃改為批信局（製発有批信局執照批局之名遂成定称）二十年全国工商業組織同業公会、以批局旧有組織係以華僑批業為名、易混於国内之華僑団体、删去華僑字様。則批字嫌於不典、或難明其業務実際、乃当局為定名

曰僑批業。各業批商号曰僑批局、沿用至今。[21]

この資料にあっては、水客と称される移民の仲介者が移民元と移民先とを巡回しており、各地に居住する移民から故郷への送金を預り、帰国時にそれを携え、各家族に配達することが記されている。そして、各地の逗留地に行館を設置し、これを批館と称した。そして、後に送金業が専門化した時にも批館の名称が存続した。

以上の二種の資料から、批局が小規模な民間の華僑送金機関として機能していたことが理解される。

そして、東南アジアにおける潮州系の批局の分布は表7に示されるが、最大は曼谷（バンコク）の一一七家、次いで新加坡の八〇家、以下、坤甸の四三家、檳城二八家、日里、堤岸の各二五家、香港の二二家と続いている。ここでは、移民者が最も多い曼谷を始めとして、移民者の数によって批局の数もそれに比例していると同時に、金融センターである新加坡と香港にも批局が多いことは注目される。

華僑送金額については、その全体を把握することは極めて困難である。理由は、(1)送金額は、零細な額が集まって多くの地域から送られるため集計が難しいことと、(2)統計が部分的に公表されたこともあるが、それは各国現地において排華風潮を引き起こしたため、以降調査は停止された。しかし、送金が受け手の側の生活にとって重要であることに変わりは無く、潮州では、全人口の四〇％から五〇％がこれに依存しており、その他公共投資や事業投資において地域経済に対する影響も大であった。住居を新築する際にも、八〇％から九〇％の人は送金に依存したとされる。

送金額の全国的変化につき、一九二〇年代以前は年間数千万元、二〇年代は一億元以上、三〇年代には二億元以上であったが、後半より戦争の影響によって減少した。また戦後は、各国政府が為替管理を厳しくしたため送金は制限された。送金のピークであった三〇年代の広東省の数字は表8に示される。

表7　潮州グループの南洋各地における批業商号統計表（一九四六年調査）

地名	商号数	地名	商号数	地名	商号数
（英属）		峇東色海	一	蘇門答臘	二五
香港	二二	寮内	一	日里	三
馬来亜		居鑾	一	邦戛	一
新加坡	八〇	古達	一	英得其利	
檳城	二八	吉寧丹	一	爪哇	
怡保	六	彭享北干	二	巴城	一
柔仏	一二	丁加奴閔	二	（法属）	
吉隆坡	九	頭角	一	越南	
霹靂	七	太平	二	堤岸	二五
麻六甲	一〇	北婆羅洲		金塔	三
芙蓉	五	沙拉越	一七	金辺	一
巴双	五	山打根	五	（暹羅）	
安順	二	（荷属）		曼谷	一一七
峇株巴轄	二	東婆羅洲		戈叻	一
峇株巴虱	一	坤甸	四三		
斗湖	三	山口洋	二	合計	四五一家
吉礁	二	三発	一		

（出典：『潮州志』実業志、商業、76頁）

華僑送金は、それが外国から中国に送られることから、何を基準貨幣として計算するのか、また、如何なる方法で送金するのかという、送り手と受け手の中間部分に幾つかの重要な問題があった。

表 8　1937年広東省華僑匯款集計(1,000元)

台山，開平，新会，中山，鶴山，順徳他	72,000
潮州各県及び梅県	62,000
瓊州	12,000
高雷九県	3,500
欽廉四県	500
その他（花県，番禺，南海，東莞，恵陽，海豊他）	20,000
合　計	170,000

（出典：姚曾廕『広東省的華僑匯款』商務印書館，1943年，41頁）

(1)　郵便問題

批局は、送り手の手紙を現金と共に送る。この送信業務の変化につき、潮州志は次のように記している。

批局初設値清末銀幣複雑時期本国銀円有七銭七二之分外来銀円又有大洋六七之別批款分発毎生詰駁。嗣由新加坡批局主張、以地方最高値之銀円為標準、一律採用大洋匯寄。沿用至民国二十四年、白銀収帰国有、以後歴用政府法幣。惟日本盤踞汕頭期間、曽一度改用儲備券通行。国幣地区則以批銀一元準発国幣二元。至華僑寄款批信、歴係封口緘固、僑眷回批由批局特製形状、比普通信函為小、亦用封緘辦法。惟抗戦時為避免検査責任、来往改用批条法同郵局之明信片、且因郵寄困難失脱擱滞随時而有故、正条之外加立副条、光復後回復常状。

批局既須按址送交批款而携備巨額現金出入山谷野径、難免盗賊之虞、有需集合同業力量以維護。故清光緒中汕頭已有南僑批業公所成立。至民国十五年間、改為汕頭華僑批業公会。二十年又改為汕頭市僑批業同業公会。各県則首推揭陽。民国二十年間即有揭陽批業公会設立。潮陽則因解款関係、抗戦中設有潮陽県僑批業公会。但仍以汕頭公会為総枢、負保障全潮批款安全責任。訂有保護奨卹追究等辦法。官庁民衆皆楽協助、故失批之事尚少聞也。

批局初期、在外洋収集批信後、逐帮配輸運汕、携帯自由有如貨品。自郵政設立

始限制転寄郵局、以総包秤重計算郵資、毎重二十公分合平信一封郵費。大約回批毎百封僅郵費五角。至第一次欧戦発生、法荷等国積極提高属地歳収、以充戦費、廃止批信秤重辦法、逐封照平信徴費。其中南洋荷属批信、多係英属転駁至汕、無大関係、法属安南地方則実行。後甚連回批総包、至越法郵局復要求華僑補貼郵費、而許以戦事結束回復総包旧例。時華僑以減納国郵而加納法郵殊為非計。将回批自行在国内逐封貼郵寄往、自此遂成定例。欧戦結束後、総包不能恢復。及民国七年、政府擬将民業信局包括批局一律取銷。経汕頭批業挙派代表向北京政府呼籲後、得予以無限定展期。以至郵局発展達於可能分発僑批為度。十七年全国交通会議開会南京、議決実行取銷民局。復経南洋各港華僑力争、経年始決定将批局与民信局画分、批局仍予保留。惟須向郵局、領取掛号執照。批信如旧総包郵寄、但逐封計費。照国際平信減半徴収郵票、合計貼於総包。包面解決後、南洋英属郵政亦照此半価辦法施行。惟暹羅郵政則自起取締、凡寄来僑批、皆逐封徴足平信価額、方許総包。至二十二年、郵局又宣佈截止発給批信局執照。意在使批局只有停業、而無新増逐漸減少、以帰銷滅。而以前所有取締皆関国際郵程、若僑批已納国際郵資寄至汕頭後、任由批局自行携帯分赴各県。苟寄郵代帯、則総包秤重毎二十公分納国内平信一封郵資。内地回批付汕候寄出国者、亦同此情形。但三十五年、郵局又増訂辦法、定批局対批信之携帯、以一郵区准一県市範囲内為限。例如僑批寄抵汕頭後、欲転出各県郷村、須逐封再納国内平信郵資、寄之郵局。若批局自帯則郵資納足外、自帯人又須申請郵局給予証明書、方得帯運。三十六年再定、国内批局不得接理国外非其分号之批信。在国内向未設有分号理批之地方、不准増設。在国外雖有分号地方、亦不准添設、層層限制批局業務。至是已臨残照之景。(22)

ここでは、重量計算で手紙を一まとめにして送り、郵費を節約していた方法が、各植民地政府によって禁止されるに至った経緯が述べられている。更に国内の配達にあっても一通毎に計算するに至った。

(2) 為替問題

華僑匯款は現金を直接に携帯する方法が最も直接的であった。しかし、量的には為替送金の方法が圧倒的に多かっ

たと考えられる。そこでは次のような方法が一般的であった。

シャムにおいて批局が華僑資金を吸収し、為替送金をおこなう方法には二種類がある。第一は、まず銀号に対して期貨（先物商品）を予約し、その後価格を計算して送金額を受取り、現物を売却する方法である。第二は、まず日毎に計算される套匯（普通為替）の為替相場を基準とし、日毎に送金額を受取り、現物を売却し、その後に送金額全額を用いて現物を購入するという方法である。為替変動の程度およびその趨勢がいずれの方法を選択するかの規準となる。批局が、ある日の為替価格が有利であると判断したとき、直ちに銀号または銀行に対して、ある月の期貨の一定量を予約する。この予約額は、その銀号が過去の経験において毎月取扱った華僑為替送金の額を見て決定され、その期限は普通二ヵ月を限度とする。交渉する為替価格は、電信為替と手形送金とに分かれ、前者は高く、後者は安いので、電信為替を予約する者が多い。

交渉決定の後、批局は日々の銀行の相場および汕頭・海口の金融状況の電報に基づいて僑民から為替資金を受け取る。批局の〝買い〟と〝売り〟からは、時間の差異や為替価格の変動によって、利益や損失が生ずる。まず、タイから香港への送金について見ると、仮に予約為替価格が一バーツ＝一・四七香港ドルであり、銀行の相場が一バーツ＝一・四七五香港ドルであるとする。批局が套匯の為替価格を計算するときに根拠とする香港ドル為替相場は、当日の銀行の為替相場と余り格差があってはならない。この状況下では、期貨を予約し、現貨を売却した批局は欠損を免れない。仮に銀行の為替相場が一バーツ＝一・四六五香港ドルであれば、批局は利益を得ることになる。実際にはタイと香港との間の為替相場は比較的安定していたので、相場変動によって生ずる損益も比較的少ないものであった。

次に、香港から汕頭への送金についてみると、両地間の為替相場はいわゆる『過汕水』（異常な汕頭におけるプレミアム）と称されるように、その変動は時によっては極めて激しい。この区間における批局の損益は完全に香港手形価格の上降に帰因する。この価格変動が、全体の送金の損益を主要には決定していた。仮に批局が送金資金を受取っているときに為替価格が不利であると判断し、しかも後に有利に向うときには、むしろ行動せずに為替価格が好転する時期を待つ。当然、待つことができる期間は、手紙が汕頭に到着するまでの二～三日を越えない範囲である。

批局が銀号に為替送金を委託する方法には三種類ある。第一は、香港ドル建ての電信為替または為替手形を香港の取引銀号に送る方法、第二は香港ドル建ての電信為替または為替手形を汕頭へ送り、当該銀号の汕頭支店あるいは取引銀号がタイの批局の汕頭取引銀号に香港で現金化する為替手形一通を支払う方法、第三は、中国元建ての電信為替または為替手形を汕頭に送る方法である。このうち、第一の方法が最も一般的で、第二がこれに次ぎ、第三は極めて稀である。為替手形による送金方法を利用するとき、手紙の発送と為替送金は常に同時におこなわれる。電信為替の場合、両者の間に時間の差があることは止むを得ないが、普通は手紙が汕頭に到着する数日前に電信為替が香港に到着する。(23)

為替取引は、暹羅から香港へと香港から汕頭への二段階に分けられる。暹羅から香港までは、現地において商品に投資し、その商品の売上価格によって批局の利益を獲得する方法と、商品取引時の為替相場と銀行が提示する為替相場との差によって利益を得る方法とがある。暹羅では米と木材が二大輸出品であり、それらはより高い売価を求めて各地に輸出されるから、送金に必要な香港為替の売買は、商品の販売先とは必ずしも一致しなくてよい。このことは、

東南アジア域内交易並びに東南アジアと華南地方との交易が結びついたこと、またそれによって貿易圏が拡大すると共に、貿易金融網の拡大による資金供給が増大したこと、を意味している。即ち、銀号や銀行を批局が利用し華僑匯款を単なる送金に止まらせることなく、むしろ、華南―東南アジアの市場圏に常に資金を供給し、貿易関係を促進させる投資活動としての作用を果したと見做すことができるからである。

銀行（外国銀行）の参入によって華僑匯款も新たな意味を持ったことは、「はじめに」に示した、華僑と西洋との新たな関係を示している。そこでは外国為替が多角的に取引された結果、外国銀行の経路を通り華僑匯款が姿を商品や為替に転換させながら香港に至った。そして、暹羅における華僑の経済活動に多角的な刺激を与えることとなる。

おわりに

通商関係並びに送金・決済関係の緊密化によって、移民社会は一層発達したと考えられる。潮州系華人社会がタイにおいて増加した理由は、この出と入との相互関係の強さによるものであると言えよう。そしてこの関係は、潮州とタイとの間に幾つかの中継拠点を形作ることによって維持・強化されていったと見ることができる。その代表として、香港・シンガポール（マレーシア）を挙げることができるのであり、既に華僑送金の項において見たように、両地は、東南アジアと華僑とを結ぶ中継センターであると同時に、両地間の関係はさらに北上して、上海・天津・営口・大連へと連なる流通の基幹ルートの一部を構成していた。そして潮州からの移民ならびに潮州とバンコクとの関係も、この基幹ルートを支えた歴史的な担い手の一つを示していたと見ることができるのである。(24)

1 重松伸司編著『現代アジア移民――その共生原理をもとめて――』名古屋大学出版会、一九八六年、Donald L. Horowitz, *Ethnic Groups in Conflict*, University of California Press, 1985, Peter Brown, Henry Shue eds., *Boundaries; National Autonomy and its Limits*, Rowman and Littlefield, 1981.

2 拙稿「伝統社会与庶民金融――新加坡・馬来西亜華人社会的「合会」与「銀信滙兌」――」尾上兼英編著『東南亜華人伝統戯藝之研究――新加坡・馬来西亜』東京大学東洋文化研究所、一九八五年。

3 拙稿「「華僑」史に見る社会倫理――華僑・華人・華裔のアイデンティティ――」『思想』八〇一号、一九九一年三月。

4 呉継岳『六十年海外見聞録』南粤出版社、香港、一九八三年、六九―七〇頁。

5 『大清實録』康熙朝、康熙六一年六月九日。また、野田彦四郎「清とバンコック王朝との国際関係について」『東南アジア――歴史と文化――』一九七一年第一号、高崎美佐子「十八世紀における清タイ交渉史――暹羅米貿易の考察を中心として――」『お茶の水史学』10号、一九六七年。

6 Ng Chin-Keong, *Trade and Society; The Amoy Network on the China Coast 1683～1735*, Singapore University Press, 1983, Sarasin Viraphol, *Tribute and Profit; Sino-Siamese Trade, 1652～1853*, Cambridge, Mass., 1977.

7 須山卓・市川信愛共著『華僑社会の特質と幇派――その歴史的変容過程の研究――』長崎大学東南アジア研究所、一九七六年、四五頁。W. Skinner, *Chinese Society in Thailand, An Analitical History*, Cornell University Press, 1957, 陳烈甫『東南亜洲的華僑・華人与華裔』正中書局、一九七九年。

8 姚曾廕『広東省的華僑匯款』商務印書館、一九四三年。

9 呉継岳、前掲書、一三一～一三五頁。

10 同前、一三一～一三三頁。

11 同前、一二六頁。
12 同前、一二二～一二三頁。
13 同前、一二七頁。
14 同前、一二九～一三〇頁。
15 同前、一一八～一二〇頁。
16 『泰国潮州会館成立45周年紀念特刊』曼谷、一九八三年、一五頁。
17 James C. Ingram, *Economic Change in Thailand Since 1850*, Palo Alto, 1955.
18 Ta Chen, *Emigrant Communities in South China; A Study of Overseas Migration and Its Influence on Standard of Living and Social Change*, Institute of Pacific Relations, New York, 1940.
19 『潮州志』実業志、商業、八〇頁。
20 芮詒塤「有信銀庄（批局）瑣憶」『汕頭文史』第四輯、一九八七年五月、九四頁。
21 『潮州志』実業志、商業、七三頁。
22 同前、七三～七四頁。
23 姚曾廕『広東省的華僑匯款』商務印書館、一九四三年、二三頁。台湾銀行『南洋華僑と其本国送金・投資問題』一九四一年、興亜院華中連絡部『華僑送金に関する報告』一九四〇年。
24 『香港潮州商会成立四十周年紀念特刊』、潘醒農編著『馬来西亜潮僑通鑑』新加坡、一九五〇年。